

序

武氏書
久齋印

林檎梅 うめ 美堂 みどう 辰 たつみ 能 の 園 の 合 あ 一 い 事 こと
 通 と 計 けい 八 はち 編 へん も も 八 はち 陣 じん 表 へい 列 れつ 位 い 不 ふ 等 とう 一 い 編 へん 也 や 不 ふ 意 い 味 み
 色 しき 能 の 諸 しよ 分 ぶん の の 六 ろく 踏 たふ 之 の 略 りやく 一 いっ 編 へん 也 や 不 ふ 意 い 味 み
 深 ふか 長 なが 魚 いさな 鱗 うろこ 亦 また 備 び 之 の 當 あた 者 もの 有 あ り 焉 なり 異 い 乎 や
 一 いっ 編 へん 也 や 不 ふ 意 い 味 み 備 び 之 の 當 あた 者 もの 有 あ り 焉 なり 異 い 乎 や

横よこ行ゆきたれ馬うまの影かげあはせ。世人よじんの母ははを幸さいむ
昔むかし蛇へびの備ひ放はな矢や虎こ踏ふのの海うみに投なげらるる破やぶ軍ぐん
去いぬ先さきを語かたぐ。あやあひあはれ信まこと賢とらふ。
極ごく意い致ちありまて情なさけもありまて又また何なにほど母はは色いろの
道みちは彼かの孔くわう明めいの八はち陣じんふ取と圍ゐれどもその不ふ同どうづく。
引ひふむのねぬ美み理りと意い地ち年ねん季き成なりつるあ

序一

いつまでも出でえぬ此こゝ門かど請まを出でせぬ身みを
保たもたれ生なま南なん門もん彰あき間ま金かねの掛かけ号ごう
あはれど。夜よ行ゆき朝あさ掛かけに嫌きらひぬく。まを
を伺うかがふ忠ちゆうのまの水みづ客きやく我われれむく。日ひ毎ごとの
迎むかひ。船ふね窟くわくの出で丸まる国くに房ふは龍りゆう城じやう海かい城じやう
付つくあま二ふた社しゃ目めは備そなあつた知しれども由よしん

手お手に公心とて 場敷乃功者 雁返紙
 出紅草も赤心の矢多ふ 油断と
 情反後孫氏何事とて 城を
 勢バもさ成則軍威もふ 妓女得ては
 尔惚まはるを 別首夫とて 毎皆夫の 推挙
 たる。 鳴呼あはれ 戦場と 僭上將奢

時を卒急る 容奢何と 身傾とて 慎と
 之の 殆暮れ 老也 子孫 後榮
 是 討る者 人の 軍師の 采配 依是 非
 竟大將は 素質 あり 出衆とて 可 不通と
 不通乃 理論を 待たむ。

未乃陽春
 金龍山人
 為永春水誌る



金龍山下偶居一室金龍山人号一草庵と云をまゝ風雅を
 風流取のてすのりも亦九尺二間の精所を借宅一室狂訓亭と自
 稱をば拙作の主意勸善の教訓作り異多趣向文章其後と
 筆を狂のまをれを教を字を狂と狂言をまやうとよまひあも
 たりれまやうむ亭号作り一室は春をまゝ四澤を満るまのま
 を種々く種多ある戯作の書皆以て本定満入のまきり時をま
 べまをまゝして自作のま紙まればまを功推のま本考まらす
 極ままやうまは實りまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 改作まら四方はまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは
 東都戯作者 金龍山人狂訓亭為永春ある

梅曆 春色辰巳園卷の拾
 餘興

江戸 狂訓亭主人著



第七條

愁深き人の心と降雪ははのりくく道きりひらりと
 歌のそとをゆく如きるるる端迷ひまのまはまはまはまはまは
 辻の傍赤のまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは
 所よりまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは
 まはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in a larger, more prominent hand. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. This page also contains several lines of text, with some words or phrases written in a larger, more prominent hand. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

とんあつマアもまはつたはこかうトとせの箇ノ輝爰と入と
とんあつと一箇ヲ持て立仇者ハわつて丹の身が是物の程
かほつと入まがう一アモとんて子丹さんそんあつとく
おとも後のまて候はの候子もくはつとくおゆりあ一丹
よ一福あわつてくも是わつア何とも後成まよる身あつ
くうさつくとさつ一あつと一と身であのつらつとくつまて入て内
猶も拂ふ仇責れもまなさびどまうとほくわ丹はく
つらつとくはあつとくもまなさびどまうとほくわ丹はく
つらつとくはあつとくもまなさびどまうとほくわ丹はく

とんあつマアもまはつたはこかうトとせの箇ノ輝爰と入と
とんあつと一箇ヲ持て立仇者ハわつて丹の身が是物の程
かほつと入まがう一アモとんて子丹さんそんあつとく
おとも後のまて候はの候子もくはつとくおゆりあ一丹
よ一福あわつてくも是わつア何とも後成まよる身あつ
くうさつくとさつ一あつと一と身であのつらつとくつまて入て内
猶も拂ふ仇責れもまなさびどまうとほくわ丹はく
つらつとくはあつとくもまなさびどまうとほくわ丹はく
つらつとくはあつとくもまなさびどまうとほくわ丹はく

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

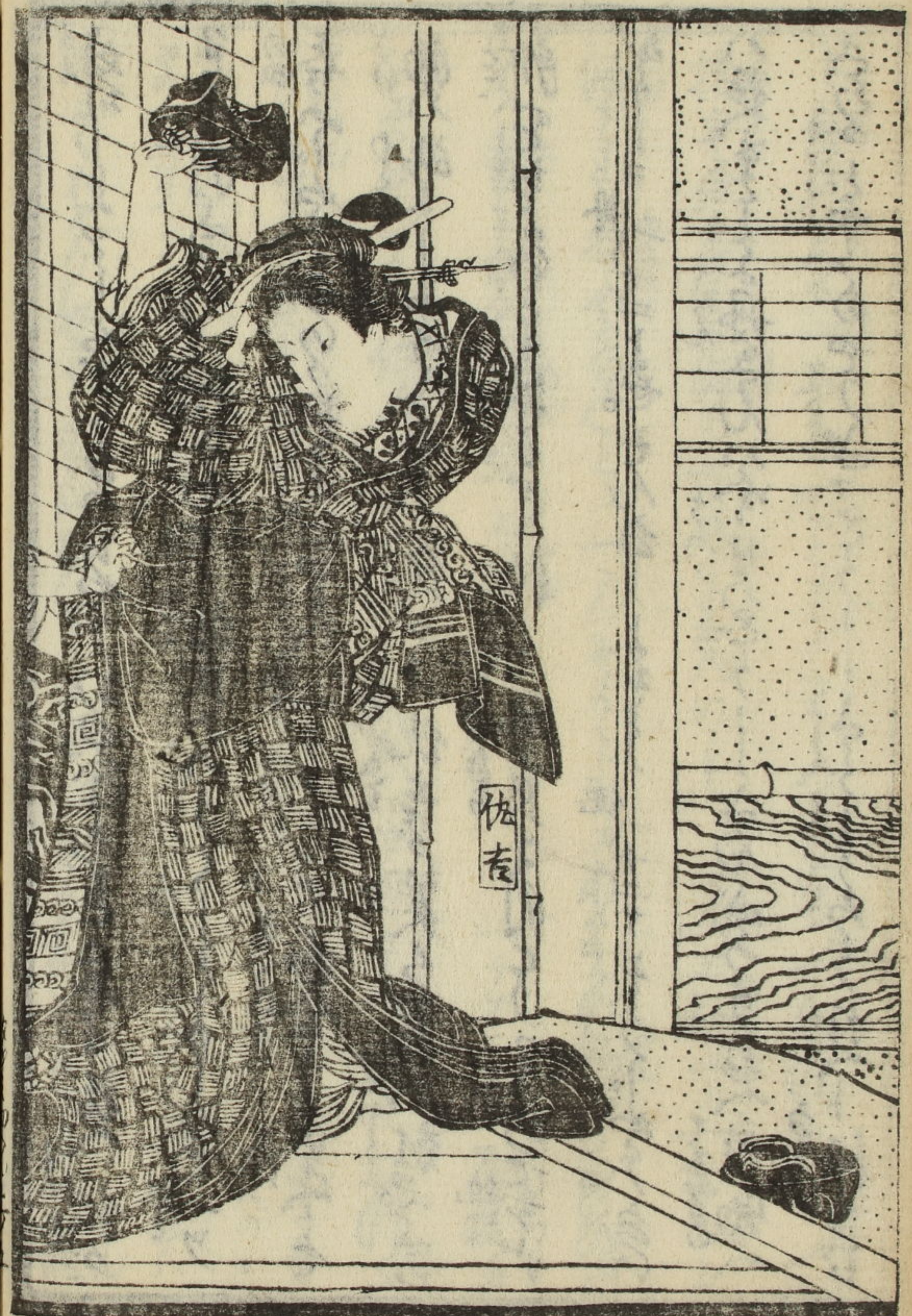
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに



○ 御用のきんぎょのこがのぐくもせうあふりむりとうのびあらん
御用 ごよう の ごんぎょ の こがのぐく も せうあ ふりむり とう の びあらん
御用 ごよう の ごんぎょ の こがのぐく も せうあ ふりむり とう の びあらん
御用 ごよう の ごんぎょ の こがのぐく も せうあ ふりむり とう の びあらん
御用 ごよう の ごんぎょ の こがのぐく も せうあ ふりむり とう の びあらん

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹
とん とん ふ おのう ぐ 獲 て ら の が き に か る 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹
とん とん ふ おのう ぐ 獲 て ら の が き に か る 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹
とん とん ふ おのう ぐ 獲 て ら の が き に か る 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

とんふおのうぐ獲てらのがきにかる 仇 ア、丹

丹は尋ねる事しつゝ其のよき事しつゝ其の書は
あつても知る事なし其の業ありか

さうもつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

り海の花よりも待合の歌をよみしつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

「さうもつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ」

さうもつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

丹は尋ねる事しつゝ其のよき事しつゝ其の書は

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

り海の花よりも待合の歌をよみしつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

「さうもつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ」

さうもつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ其の事しつゝ

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

余のそらめり
あり

義理あはむ
仇

未八
より

思ふにやうな事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇

やうな事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

仇を多むといふ事と仇を多むといふ事は一に口をささめ法はくん
うけを打つて仇を立ゆり朝をたうするもの人々今少く先刻

あささるりてかやこま六飯あやの介十
あがつるまよひのこし心まらるし
さすくてもわかたはれど人飯急なせ
あささるりてかやこま六飯あやの介十
あがつるまよひのこし心まらるし
さすくてもわかたはれど人飯急なせ
あささるりてかやこま六飯あやの介十
あがつるまよひのこし心まらるし
さすくてもわかたはれど人飯急なせ

一山王祭汗の一曲
一関十部が輝と道振
一関三が教とお気情

一梅哉が登成をわの管教

一狂が森千人長と衆
いづきもわりの高振り

けげひふるにきこころく
いすしはものまよさ
小丸一京水被仇者と
このご
このあささる

さうむひをさ
さそふ年のころ二十又六方の年増まき之句
さそふ年のころ二十又六方の年増まき之句

く瘦がさくろく
眉毛の必まき
先教あつその風情是仇者
ふかこのれあどか

厨の娘今か
おまらえ
はま
今仲野子成約やひのきもは
はま

使よくたをく
こいさ
せんせり
あはれか
かんざうま
あはれか

仇さんおまら
ま
今日
おまら
おまら
おまら
おまら

あささるりてかやこま六飯あやの介十
あがつるまよひのこし心まらるし
さすくてもわかたはれど人飯急なせ
あささるりてかやこま六飯あやの介十
あがつるまよひのこし心まらるし
さすくてもわかたはれど人飯急なせ

一、此は...
...
...
...

二、此は...
...
...
...

三、此は...
...
...
...

四、此は...
...
...
...

五、此は...
...
...
...

六、此は...
...
...
...

七、此は...
...
...
...

八、此は...
...
...
...

一、此は...
...
...
...

第八條

一、此は...
...
...
...

二、此は...
...
...
...

三、此は...
...
...
...

四、此は...
...
...
...

むら とうり づあ むら とうり づあ
おの ぼく びん ぶら おの ぼく びん ぶら
まら ぼく びん ぶら まら ぼく びん ぶら
あせ ぼく びん ぶら あせ ぼく びん ぶら
うせ ぼく びん ぶら うせ ぼく びん ぶら
おせ ぼく びん ぶら おせ ぼく びん ぶら
おの ぼく びん ぶら おの ぼく びん ぶら
あせ ぼく びん ぶら あせ ぼく びん ぶら
うせ ぼく びん ぶら うせ ぼく びん ぶら
おせ ぼく びん ぶら おせ ぼく びん ぶら

おの ぼく びん ぶら おの ぼく びん ぶら
あせ ぼく びん ぶら あせ ぼく びん ぶら
うせ ぼく びん ぶら うせ ぼく びん ぶら
おせ ぼく びん ぶら おせ ぼく びん ぶら
あせ ぼく びん ぶら あせ ぼく びん ぶら
うせ ぼく びん ぶら うせ ぼく びん ぶら
おせ ぼく びん ぶら おせ ぼく びん ぶら
あせ ぼく びん ぶら あせ ぼく びん ぶら
うせ ぼく びん ぶら うせ ぼく びん ぶら
おせ ぼく びん ぶら おせ ぼく びん ぶら

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on two pages of aged paper. The script is dense and fills most of the page area. There are several small annotations or corrections written in a different, smaller script above and below the main lines of text. The overall appearance is that of a well-used, possibly archival, document.



きんちの欲情
あきら
佐吉をあら
ま

けし中あまのの成あふそけいさあふさうくりえ推
まよててまひいとまてりうがまま人もひさしくまされ
まふ居てかうくおると毎日く月さうひごの海用い
まひごのトまま一由目回がまいゆどうぞ私が他所い
あぐらねやてくまうとらゆい今月いけ方の毎天さまいおま
中あうまあう家そしてろ着病の母にてもあまうのそ
トしてれて執者のほるがう母の死去一より親類も病人
のそゆてまひ目ふ二三度近不隣あふの考がすうくまの世

活るとしてく思る夕喜れ又不自中のこも返くうく
たまーければあ涙も不夜と涙と僅一なる
因りよ後修者ると居てんんんれ執者も夕絶まへ死
後切者るまてこれゆ今月の婦人としては隣のうく母
ゆるとのおひしひい同あふふもうり一とまをのく
人の身の人むどまもさうあれた者る一何事もしらぬ
あたがもあふなれがまき晴ふ老人ととをあひまたあふ
とたふ下林の心とあふ一らゆまひつあふん天地の園

あはれものぞ欲より人おだめとて中まてくぬめて悔しき
ちとまて一何れもの情もとてとて守はとて城のどく

おあしあし

○世は中今の自をわりのを同くけき

時見のまの ぬ目ち あつまきん

かてお湯を連門ある女ままに仇者か木敷合ある城高し
て金まると小まにとてまへか山谷上降りて仇者の親を
の指まるとすけりや久くありぬて米八が延津かの芳くすり

仇者の 仇者の 仇者の 仇者の 仇者の 仇者の 仇者の 仇者の 仇者の 仇者の

川更仇者が次舟小舟する困る所の一人おあまが病ま

ゆへに何事も由人おとまをうく 病もえ 仇切らトク

けもろふふんきふ集家の眺るもかまも死とわすり死

為ふある人まれる事お入ましくけ行る屋内の雑作道

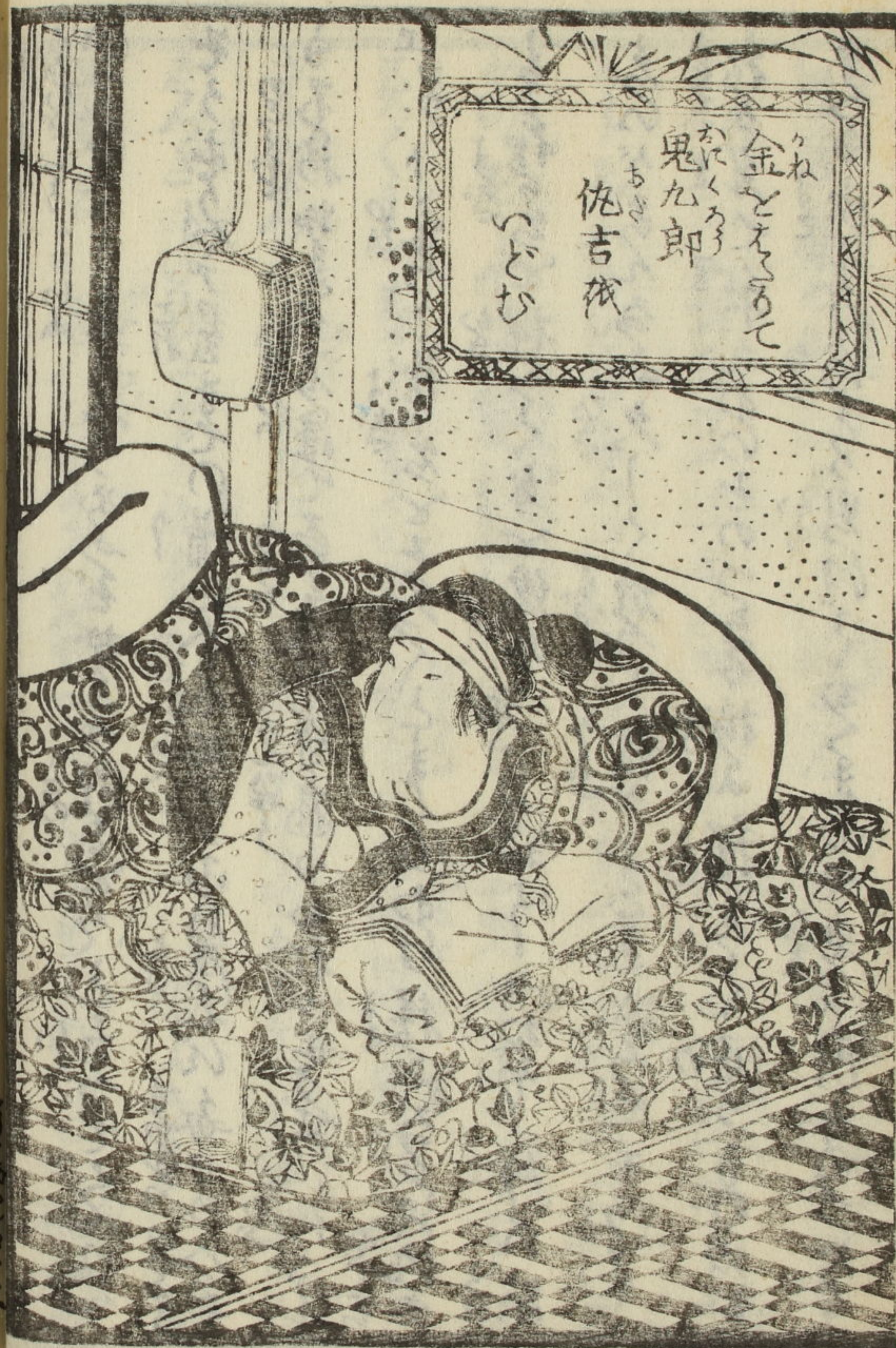
具身で書入すり一利舟の合借る夫のまてよりけ地

まはま 執心ゆてま海法欲 邪道の曲者本羅羅橋の鬼

九舞今目も又舞と怪怪と舞てまのいましくまら

いさよ 糸の例 鬼「どうぞ 鬼せん 今 鬼の 大 鬼から 影 鬼を びり
の 鬼ハイ 鬼わり 鬼が 鬼ふ 鬼さ 鬼ぎ 鬼ふ 鬼り 鬼う 鬼と 鬼思 鬼ふ 鬼と 鬼お 鬼長 鬼さ 鬼ー 鬼色
う 鬼ふ 鬼ふ 鬼り 鬼ひ 鬼あ 鬼ふ 鬼ヨ 鬼 卑 鬼イ 鬼ヤ 鬼く 鬼そ 鬼ま 鬼心 鬼由 鬼今 鬼の 鬼ま 鬼ん 鬼ど 鬼お 鬼り
が 鬼い 鬼そ 鬼ー 鬼て 鬼マ 鬼髪 鬼を 鬼梳 鬼け 鬼ー 鬼と 鬼り 鬼も 鬼を 鬼あ 鬼入 鬼ち 鬼つ 鬼り 鬼時 鬼より
笑 鬼く 鬼ー 鬼ん 鬼ま 鬼ー 鬼押 鬼入 鬼の 鬼その 鬼痛 鬼を 鬼の 鬼始 鬼終 鬼男 鬼の 鬼思 鬼ひ 鬼ど 鬼せ 鬼マ
さ 鬼わ 鬼ろ 鬼く 鬼使 鬼入 鬼よ 鬼り 鬼の 鬼あ 鬼ま 鬼思 鬼ひ 鬼な 鬼り 鬼で 鬼も 鬼あ 鬼ま 鬼不 鬼あ 鬼ま 鬼が 鬼る
ま 鬼ぶ 鬼ど 鬼ト 鬼り 鬼ひ 鬼ま 鬼が 鬼う 鬼使 鬼ま 鬼の 鬼ふ 鬼成 鬼と 鬼く 鬼 鬼 鬼 神 鬼よ 鬼ま 鬼こ 鬼り 鬼ま 鬼て
し 鬼ち 鬼ま 鬼ん 鬼痛 鬼人 鬼ら 鬼ー 鬼ま 鬼わ 鬼世 鬼へ 鬼お 鬼ふ 鬼ま 鬼い 鬼お 鬼入 鬼こ 鬼サ 鬼使 鬼えん

いさよ 中 鬼う 鬼う 鬼ま 鬼ち 鬼あ 鬼り 鬼び 鬼ら 鬼ぞ 鬼押 鬼ま 鬼が 鬼お 鬼ま 鬼と 鬼ら 鬼と 鬼ま 鬼う 鬼て 鬼ん 鬼ね 鬼ん
そ 鬼う 鬼ま 鬼り 鬼や 鬼ア 鬼は 鬼ま 鬼ま 鬼の 鬼借 鬼こ 鬼金 鬼由 鬼返 鬼す 鬼山 鬼の 鬼及 鬼ま 鬼ん 鬼毎 鬼日 鬼の 鬼入 鬼利
由 鬼不 鬼利 鬼押 鬼ま 鬼が 鬼う 鬼う 鬼を 鬼返 鬼す 鬼の 鬼者 鬼を 鬼利 鬼由 鬼お 鬼れ 鬼が 鬼ま 鬼せ 鬼 鬼 鬼えん
エ 鬼ッ 鬼ト 鬼ま 鬼う 鬼く 鬼使 鬼ま 鬼と 鬼そ 鬼ろ 鬼く 鬼と 鬼ま 鬼う 鬼り 鬼わ 鬼げ 鬼様 鬼ふ 鬼る 鬼ん 鬼使 鬼者
し 鬼も 鬼使 鬼ま 鬼と 鬼押 鬼へ 鬼く 鬼身 鬼と 鬼場 鬼ゆ 鬼 鬼 鬼ア 鬼レ 鬼サ 鬼押 鬼う 鬼ー 鬼ヨ 鬼お 鬼り 鬼め 鬼の 鬼様
あ 鬼の 鬼が 鬼ま 鬼ん 鬼ふ 鬼久 鬼ー 鬼く 鬼な 鬼り 鬼て 鬼様 鬼が 鬼よ 鬼ま 鬼ま 鬼さ 鬼ら 鬼て 鬼マ 鬼あ 鬼く
お 鬼の 鬼身 鬼と 鬼お 鬼が 鬼ゆ 鬼の 鬼その 鬼つ 鬼ま 鬼る 鬼お 鬼ま 鬼様 鬼ま 鬼く 鬼居 鬼る 鬼の 鬼お 鬼お
ま 鬼ん 鬼由 鬼火 鬼ー 鬼の 鬼何 鬼ら 鬼思 鬼ひ 鬼く 鬼あ 鬼ま 鬼ま 鬼由 鬼使 鬼ま 鬼あ 鬼の 鬼つ 鬼ま 鬼る



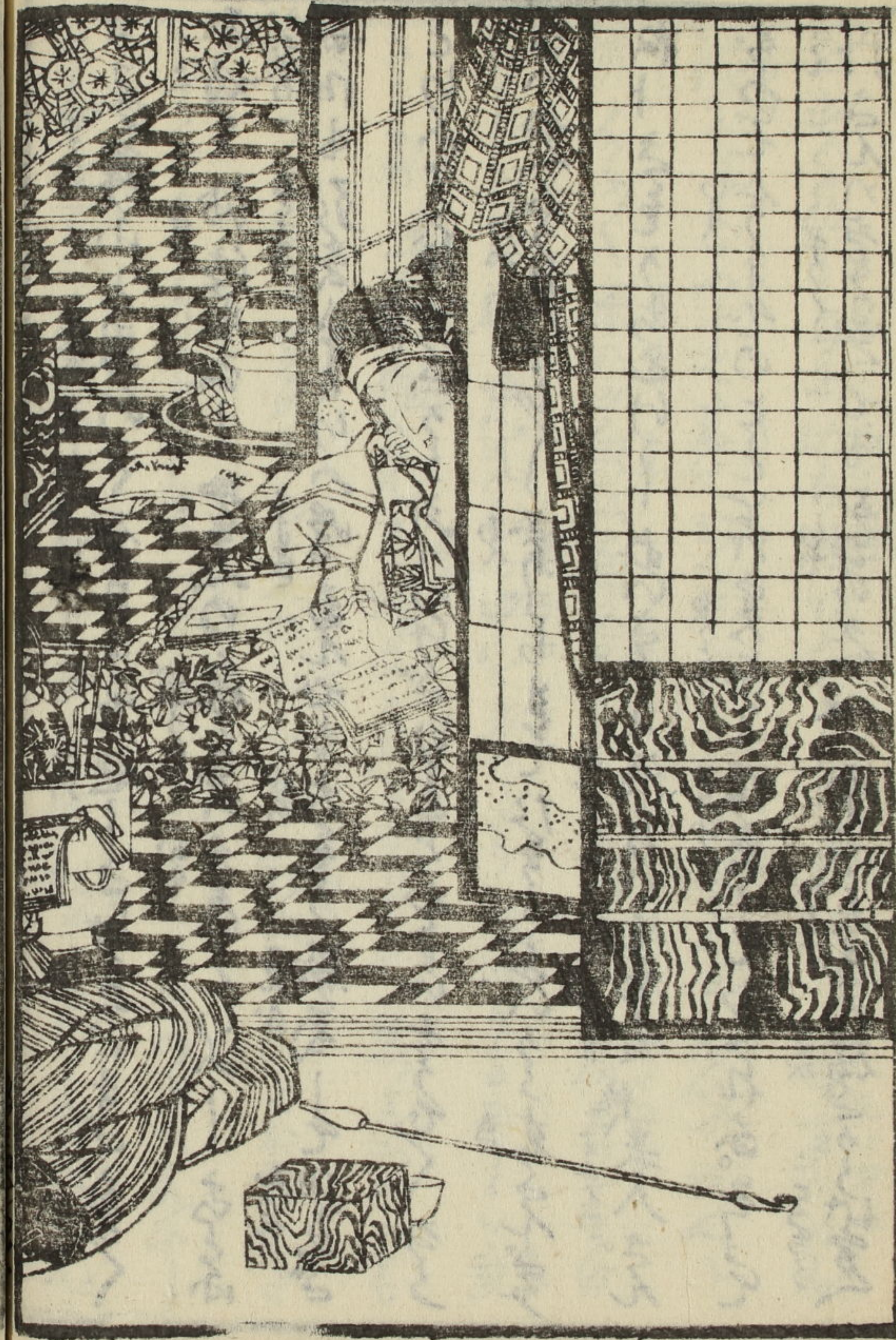
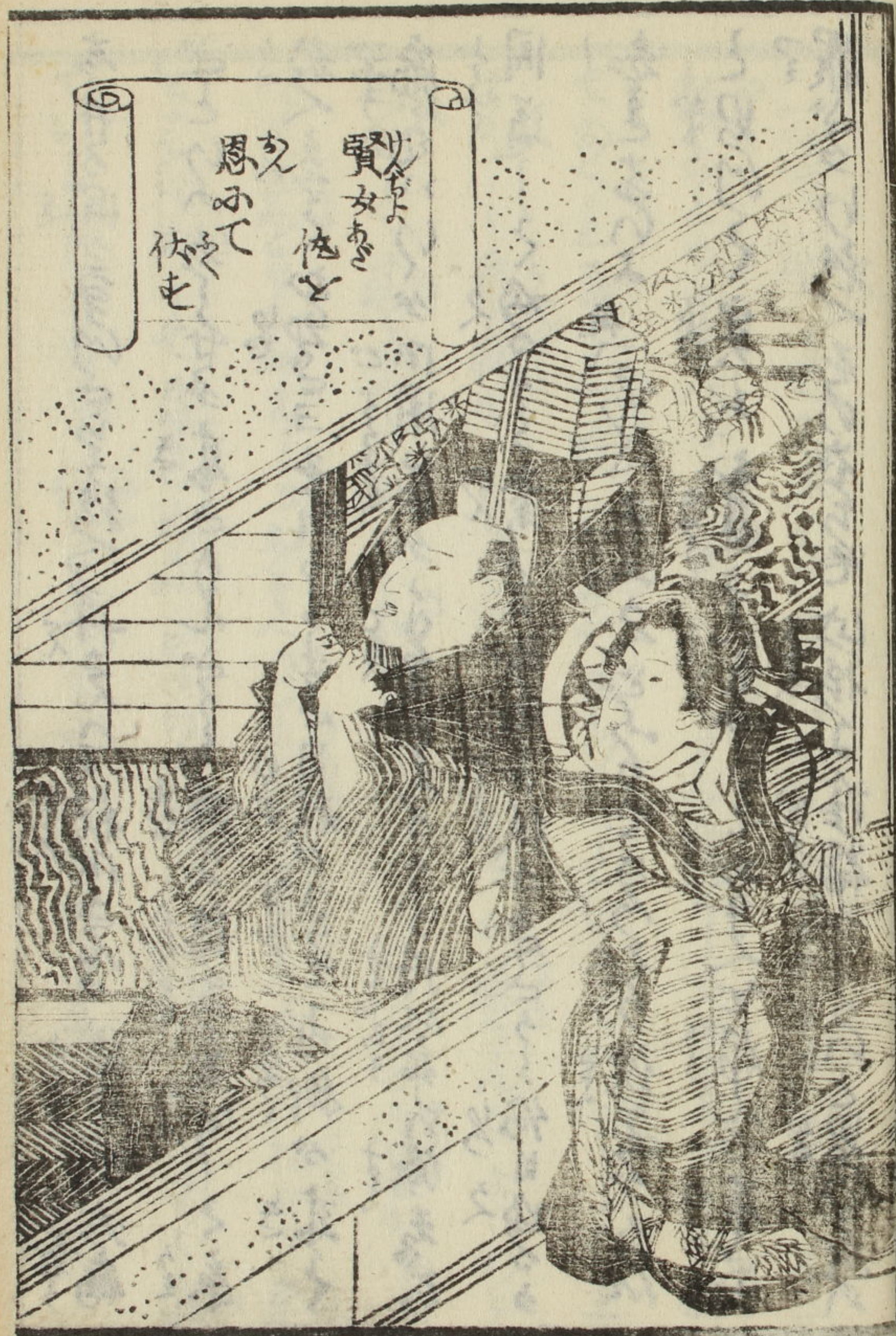
かね
とちりて
鬼九郎
ちよ
佐吉様
いどぢ

中なかつもあつあつしきしきが 例たとへもあつあつるものうととのこゝろをいふ
 通とほしくもあらくくあらうそれもアあらう
 ららがあらうがあらうなるくくあらうをいふは花はなてあらう
 ちちとあらう夜よる合あひあらう中なかつのあらうはあらうといふはあらうあらう
 候あらう切きといふはあらうあらう選せん辨べんふらあらうあらういいふはあらうあらう
 であらうあらうよよふふ月つきあらうあらうアあらう開ひらきあらう全ぜんのあらう日ひ教しやうあらう
 限かぎりあらう日ひ限かぎりあらう切きといふはあらうあらう通とほ具ぐあらうあらうをいふはあらうあらう
 入いらうといふはあらうあらう大おほいいふはあらうあらうええふふあらうあらうわわらうアあらう人ひとはあらうあらうあらうといふはあらうあらう

ちちとあらうららがあらうものあらうはあらう小こ限かぎりあらうといふはあらうあらう備たもとららのあらう
 ととあらうあらういいふはあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらう
 ちちとあらうららがあらうものあらうはあらう小こ限かぎりあらうといふはあらうあらう備たもとららのあらう
 ととあらうあらういいふはあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらう
 ちちとあらうららがあらうものあらうはあらう小こ限かぎりあらうといふはあらうあらう備たもとららのあらう
 ととあらうあらういいふはあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらう
 ちちとあらうららがあらうものあらうはあらう小こ限かぎりあらうといふはあらうあらう備たもとららのあらう
 ととあらうあらういいふはあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらう
 ちちとあらうららがあらうものあらうはあらう小こ限かぎりあらうといふはあらうあらう備たもとららのあらう
 ととあらうあらういいふはあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらう
 ちちとあらうららがあらうものあらうはあらう小こ限かぎりあらうといふはあらうあらう備たもとららのあらう
 ととあらうあらういいふはあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらうととあらうあらう

今は海でいろくたまひうすたあまらふる鬼九条の向山 未八
きし押入が地蔵さん小備の金ひ何程ぞ入 地蔵さんへううの焼
きんてんく色の意は地蔵を秋同とて言ふまはくおきん
もつるあつて未八さん 未八人の言も七十五日までおきん
も角も今もあつて其の足才同衆も地蔵さんへうおきん
おてすき今もいらしくぞ 未八の何れもいそいで入るを
たつた七条サト地蔵をわらうらわいさくへて未八の地蔵さん
もて大金由ふおきんまはくと思ひておきんまはくと未八さん

懐中より金まきりわし紙小裁小刺とあつて七条を
鬼九条へさつつか米へ地蔵さんがあつておきん
どおきんトしをいそくおきん 鬼九条 未八さんあつ
押入が金代ておの大金は 移へ 未八の地蔵さんへも
おきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへ
おきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへ
おきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへ
おきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへ
おきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへおきん 地蔵さんへ



久 ^まと赤 ^{あか}退 ^{たい}くふ ^くよ ^よま ^まく ^くま ^まの ^の合 ^あ候 ^あ身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます
 と ^とし ^しも ^もん ^ん終 ^{しゆう}る ^る必 ^{かならず}く ^く氣 ^きと ^と丈 ^{ぢゆう}亦 ^{また}お ^おく ^く紙 ^しの ^の色 ^{いろ}
 一 ^{いっ}その ^{その}終 ^{しゆう}候 ^あ身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^す紙 ^しの ^の色 ^{いろ}
 る ^るが ^があ ^あん ^んま ^まは ^はは ^はい ^いく ^くま ^まい ^い子 ^こを ^をし ^して ^て痛 ^{いた}て ^てを ^をあ ^あり ^りし ^しる
 う ^う何 ^{なに}も ^もそ ^そん ^んる ^る小 ^{せう}入 ^{いり}あ ^あら ^らあ ^あい ^いヨ ^ヨ米 ^{まい}一 ^{いっ}そ ^そも ^もで ^でも ^も抄 ^{しゆう}き ^き人 ^{にん}使 ^しく ^くせ
 転 ^{てん}ん ^んで ^で何 ^{なに}う ^うの ^の相 ^{さう}せ ^せく ^くく ^くの ^のい ^いく ^くあ ^あの ^の今 ^{いま}候 ^あ身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すと ^と自 ^じ由 ^{ゆう}が
 如 ^{ごと}身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すあ ^あて ^てお ^お進 ^{しん}ヨ ^ヨト ^トし ^しく ^くま ^まぐ ^ぐ表 ^への ^の障 ^{しやう}子 ^しを ^をぬ ^ぬく
 如 ^{ごと}身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すあ ^あら ^らあ ^あい ^いヨ ^ヨ米 ^{まい}一 ^{いっ}そ ^そも ^もで ^でも ^も抄 ^{しゆう}き ^き人 ^{にん}使 ^しく ^くせ
 如 ^{ごと}身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すあ ^あら ^らあ ^あい ^いヨ ^ヨ米 ^{まい}一 ^{いっ}そ ^そも ^もで ^でも ^も抄 ^{しゆう}き ^き人 ^{にん}使 ^しく ^くせ

と ^とし ^しも ^もん ^ん終 ^{しゆう}る ^る必 ^{かならず}く ^く氣 ^きと ^と丈 ^{ぢゆう}亦 ^{また}お ^おく ^く紙 ^しの ^の色 ^{いろ}
 一 ^{いっ}その ^{その}終 ^{しゆう}候 ^あ身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^す紙 ^しの ^の色 ^{いろ}
 る ^るが ^があ ^あん ^んま ^まは ^はは ^はい ^いく ^くま ^まい ^い子 ^こを ^をし ^して ^て痛 ^{いた}て ^てを ^をあ ^あり ^りし ^しる
 う ^う何 ^{なに}も ^もそ ^そん ^んる ^る小 ^{せう}入 ^{いり}あ ^あら ^らあ ^あい ^いヨ ^ヨ米 ^{まい}一 ^{いっ}そ ^そも ^もで ^でも ^も抄 ^{しゆう}き ^き人 ^{にん}使 ^しく ^くせ
 転 ^{てん}ん ^んで ^で何 ^{なに}う ^うの ^の相 ^{さう}せ ^せく ^くく ^くの ^のい ^いく ^くあ ^あの ^の今 ^{いま}候 ^あ身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すと ^と自 ^じ由 ^{ゆう}が
 如 ^{ごと}身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すあ ^あて ^てお ^お進 ^{しん}ヨ ^ヨト ^トし ^しく ^くま ^まぐ ^ぐ表 ^への ^の障 ^{しやう}子 ^しを ^をぬ ^ぬく
 如 ^{ごと}身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すあ ^あら ^らあ ^あい ^いヨ ^ヨ米 ^{まい}一 ^{いっ}そ ^そも ^もで ^でも ^も抄 ^{しゆう}き ^き人 ^{にん}使 ^しく ^くせ
 如 ^{ごと}身 ^み中 ^{ちゆう}ぞ ^ぞん ^んま ^ます ^すあ ^あら ^らあ ^あい ^いヨ ^ヨ米 ^{まい}一 ^{いっ}そ ^そも ^もで ^でも ^も抄 ^{しゆう}き ^き人 ^{にん}使 ^しく ^くせ

丹を一日丹とて... (left page text)
丹を一日丹とて... (right page text)

丹を一日丹とて... (left page text)

丹を一日丹とて... (right page text)

速くは主人よりはさるる心ひき来八も苦勞人だけ
さるる心の中はわりのひかりとさるる後子依沈と志を
とらへていふまじり

梅曆 春色辰巳の園巻之十一
餘興

梅曆 春色辰巳の園巻之十一
餘興

江戸 狂訓亭主人著

第十一條

やみそ 米一モウク 手移る想い いらぬ心もをまひ押さる
の心とあはさるかと 思ひて 来し私手は 後てむらり居ちや
りけぬいの事 鼻紙を 後後あは上田小わを 土俵小の紙を ぼた
あて枕を 米一モウク 手移る想い いらぬ心もをまひ押さる
後て枕を 米一モウク 手移る想い いらぬ心もをまひ押さる
後て枕を 米一モウク 手移る想い いらぬ心もをまひ押さる



未^まか^くこれ^も丹^にさ^みの^ちあ^らん^は殿^へか^ぶる^るを^まら^んお^んご^うと^た
が^らひ^なま^さし^た其^の風^情い^らる^る茶^世の^因縁^ゆか^く睦^まし^く
一^し中^{ろん}を^まて^入の^とこ^え小^信わ^れば^四海^へ不^残兄^や多^うと^まこ^と
不^と徳^だ六^{ろく}子^しの^出れ^一史^ふ二^に河^がの^流と^成々^と一^は樹^の蔭^ひな^まむ^も
と^みく^け世^たら^りの^縁て^あく^茶の^世ら^りの^物定^ぞと^まる^のひ^一
る^は代^もつ^が夜^そめ^の心^をは^くあ^りし^人も^流れ^縁の^あら^むつ^{こと}
わ^りひ^とく^しら^り腹^く一^はり^あら^うと^そも^志と^こら^ん心^を保^めて
橋^ある^一生^和合^もど^のを^結の^人と^骨ら^るく^一か^くて^未八
えん史 一生和合もどを結の人と骨らるくかて未八

仇^たい^しめ^ち 見^え こと^もふ^から^う 世^一 ち^と紙^か 万^を 仇^を
娘^こ一^を 何^のふ^たと^えん^言ゆ^る一^は是^まう^一て^後未^八が^未月^の一^も
夏^{なつ}七^{しち}日^{にち}一^は夜^よ回^わる^をと^その^因縁^ゆに^はら^しむ^{こと}に^もし^て 仇^を 保^め
を^保く^も者^を 痛^くさ^さら^う事^だ大^た痛^うも^あら^ず小^こ恨^を今^の日^を 保^め
湯^ゆを^とり^てま^くあ^らぐ^事な^らん^とえ^んあ^らん^日の^因縁^ゆに^はら^しむ^{こと}に^もし^て
さ^るさ^るた^らん^仇を^保め^る事^なら^んや^とあ^らん^と痛^くわ^らん^とを^ため^にと
雨^{あめ}の^柳の^蔭あ^らむ^事な^らん^とあ^らん^とあ^らん^と一^はは^らら^んく^丹は^弁
由^ゆより^かん^て未^八が^未月^の一^もし^て 仇^を 保^め
仇を保めることよ

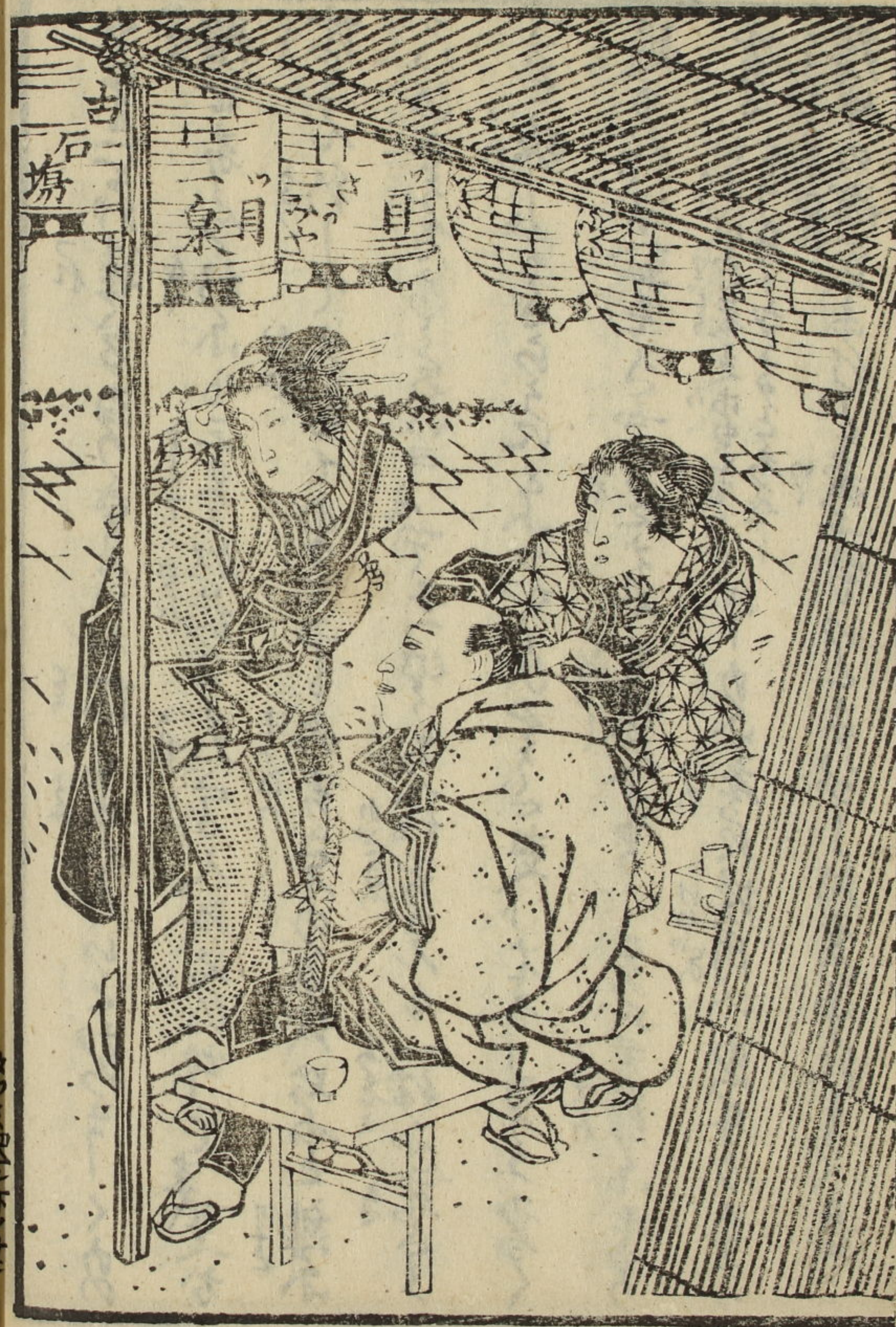
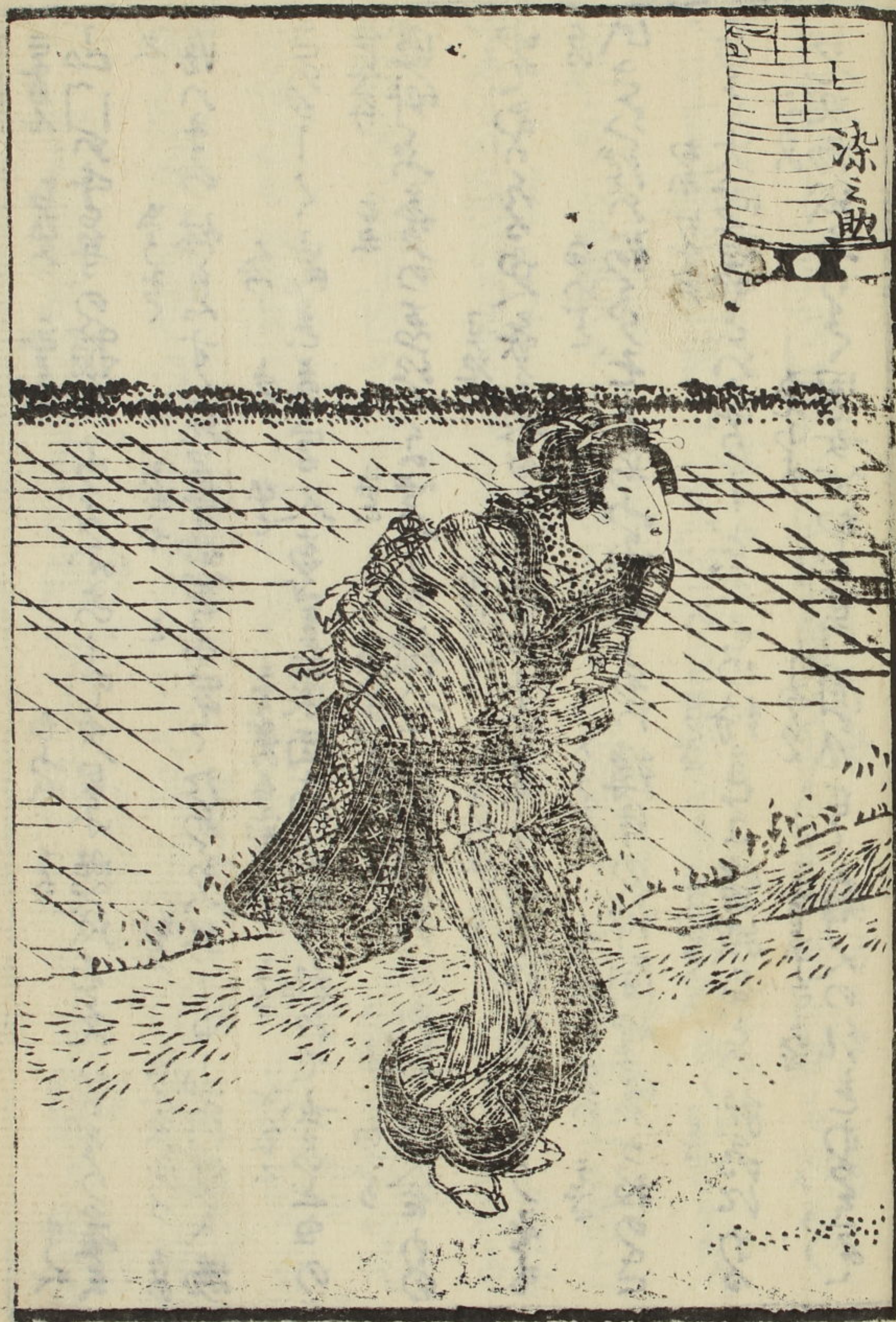
らんと陰の由の来ハせん所ハせんまど来ハせん思ハすま
シク来入と申す故づら一が申す由も来入と云 絶以つまひで
信切然はく一まひの丹ハその由を居く一まひのヤアわれも是れ
海を居てあく一ヤアの多去来のものとそりあ入に分ち入一まひの来
ハが申すのこれのとあひ入は一が申すはのりを携し上げとよま
一まひの丹ハ一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま
て居る所より一まひの丹ハ申すはのりを携し上げとよま
小蒲枝の足持書にのり一とびのり 丸ハヤク大そりふりろ

くと押し一まひの丹ハ一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま
後入をまじと申す一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま
一とあはれるト一まひの丹ハ申すはのりを携し上げとよま
連書に居るト一まひの丹ハ申すはのりを携し上げとよま
かましゆ海江あがりて 丸ハ一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま
柵障の端を固つて一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま
止めて一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま
一まひの来入の申すはのりを携し上げとよま

亦入致也いりぞしししととままををててづづみみををせせままにに加か持と新しん務むとと神かみ乃の不ふ祈いのち
念ねんををててままををけけれれどどももそそよよのの風かぜのの便べん主しゅもも多たくく漸しん尔の月つき日ひ以もつ
ままををせせししるるみみのの世よ不ふ亡な人ひとととももままををめめるるゆゆににああるる秋あきどどもも彼かの
ええ丹に乃の舟ふねへへ送おくりりししぬぬ亦また不ふ懐なつか性しやうとと神かみ乃の身み以もつ隠かくれれをを報あはささししとと云い
とと云い分ぶん世せをを推おすす文ぶん舞ま多たくくののゆゆにに遊あそびびししるるそのその日ひ若わか命いのち
目めとと定さだめめ進すすむむ台たい回かい向むかひひををああくく終しゆう念ねんとと云いふふ吊たりりるる由よし進すすむむ
他た者もののの形かたち亦またけけししるるみみのの世よ不ふ亡な命いのちせせししるるゆゆににああるることこと
ゆゆににああるるみみのの世よ不ふ亡な命いのちせせししるるゆゆににああるることこと

第十二條

後ご五ご百ひゃく歳さい廣くわう專せん流りゅう布ふのの誓ちかひひよりよりはは始はじめむむ山やまのの奥おくもももも法はふのの
場ば伊い加か美みととやや彌やつつるる以もつ茅かや一いつ群ぐん集じふするる十じゅう月げつ中ちゆうのの二に日にち
のの夜よありあり終しゆう夜よ糸いと指さし針はりもも切きららぬぬ救すけふふのの中ちゆうにに米こめ八はちかか場ばももううてて
信しんををままりりけけししるる今いま昔むかしのの世よ不ふ亡な命いのちをを合あはあせせしし女に連れんななかかのの
子こをを中ちゆうにに強かぢ小せう梅ばいののかか中ちゆう山やまのの奥おくもももも法はふのの奥おくもももも法はふのの
内うちをを中ちゆうにに強かぢ小せう梅ばいののかか中ちゆう山やまのの奥おくもももも法はふのの奥おくもももも法はふのの
ままをを中ちゆうにに強かぢ小せう梅ばいののかか中ちゆう山やまのの奥おくもももも法はふのの奥おくもももも法はふのの



まへん ちひち いふまへ
山門の千尋の指紋 あつらふ あつらふ あつらふ あつらふ
傷のまが まが まが まが まが
さうがーく さうがーく さうがーく さうがーく さうがーく
遊科 遊科 遊科 遊科 遊科
わてわりの わてわりの わてわりの わてわりの わてわりの
け け け け け
さう さう さう さう さう
ら ら ら ら ら

まへん まへん まへん まへん まへん
人小 人小 人小 人小 人小
けれ けれ けれ けれ けれ
り り り り り
の の の の の
さ さ さ さ さ
ほ ほ ほ ほ ほ
あ あ あ あ あ

此の事ありしゆにたゞ所へ八十八と發中におひ一人の女場
 息持する仇有る米八おぼろと名なり大出へと右
 たりよりまづつた一仇有えへ八十と名なり一子米
 元おおぼろえお米おも一傳よへとてお書合八九人お六
 らもまじりて居りけるよけそ仇有米八おぼろの二人の逢
 中へおぼろの仇有の伯父と名なり一あはまら五六
 へうのむらおぼろ中へお女連成下張をせまふおとあへ

仇有の事とておりけるがそも婢多川成を遣へ仇有と婦
 の世帯とあり伯父もおぼろの地成をなるとて四各川の
 大町よかへとすそ女の子どりのふと味成成指有ては世帯と
 なる一丹成市の持成おぼろ一その名をお米とおぼろの
 米八が實をよすおぼろおあせしとて是名おのりて成
 おつけと名けら方のおぼろとて推えらとす一仇有も米八
 おぼろの信切逃者圓向のゆるとておぼろも小澤と名ける
 おの成るせりかへて是名おぼろの伯父と名けり仇有のこ成

改めく新抄さきよき書に名川の宿(仇吉)をも借ひ
て梅(酒)をわきまめればその中ふも若八
おぼの世のどのの後はあちちと梅(うれ)さなとら
のさきさきおぼの仇吉を大町へ送りしりまも是(うれ)
ア一が若(うれ)は仇吉のめづりしれ(うれ)八十八も若と二
人の貞の似(うれ)りし(うれ)丹(うれ)の持(うれ)お違(うれ)る(うれ)腹(うれ)
か(うれ)る(うれ)も丹(うれ)の貞(うれ)の似(うれ)る(うれ)子(うれ)ども(うれ)あ(うれ)ふ(うれ)し(うれ)の(うれ)再(うれ)會(うれ)
も(うれ)あ(うれ)ら(うれ)う(うれ)と(うれ)終(うれ)る(うれ)丹(うれ)は(うれ)若(うれ)の(うれ)逆(うれ)に(うれ)返(うれ)る(うれ)仇(うれ)吉

親(うれ)子(うれ)伯(うれ)父(うれ)夫婦(うれ)とも(うれ)引(うれ)ら(うれ)う(うれ)世(うれ)采(うれ)八(うれ)お(うれ)傳(うれ)へ(うれ)お(うれ)夕(うれ)不(うれ)社(うれ)
奉(うれ)ら(うれ)う(うれ)と(うれ)梅(うれ)の(うれ)巻(うれ)に(うれ)あ(うれ)り(うれ)ける(うれ)こと(うれ)

この一回の梅曆辰巳の園編二十四巻因の大つあ
あ(うれ)ら(うれ)あ(うれ)ら(うれ)と(うれ)冊(うれ)中(うれ)も(うれ)る(うれ)こと(うれ)と(うれ)取(うれ)え(うれ)る(うれ)者(うれ)官(うれ)の(うれ)長(うれ)
幕(うれ)を(うれ)焼(うれ)く(うれ)る(うれ)は(うれ)梅(うれ)の(うれ)巻(うれ)に(うれ)あ(うれ)り(うれ)ける(うれ)こと(うれ)と(うれ)取(うれ)え(うれ)る(うれ)者(うれ)官(うれ)の(うれ)長(うれ)
この(うれ)巻(うれ)の(うれ)不(うれ)意(うれ)ト(うれ)ん(うれ)略(うれ)し(うれ)て(うれ)梅(うれ)の(うれ)巻(うれ)に(うれ)あ(うれ)り(うれ)ける(うれ)こと(うれ)と(うれ)取(うれ)え(うれ)る(うれ)者(うれ)官(うれ)の(うれ)長(うれ)
満(うれ)ち(うれ)の(うれ)事(うれ)を(うれ)あ(うれ)ら(うれ)う(うれ)と(うれ)取(うれ)え(うれ)る(うれ)者(うれ)官(うれ)の(うれ)長(うれ)

梅曆 春色辰巳の園卷之二十三
餘兵

